

P1-056

小児看護学実習に導入したプリパレーションを用いた教育方法とその成果

上山 和子、山本 裕子

新見公立大学 健康科学部 看護学科

小児看護学実習に導入した「プリパレーション」を用いた教育方法とその成果を明らかにし、今後の教育方法に活かすことを目的とする。

【研究方法】

- 1) 研究デザイン：質的帰納的研究
- 2) 対象：2017年から2018年にA大学小児看護学実習の外来実習でプリパレーションを用いた実習を展開した学生の「小児看護学実習」のレポート記録で本調査に同意が得られた24人分。
- 3) 調査方法および分析方法：小児看護学実習でのレポート記録を内容分析する。分析の過程では信用性・確証性を高めるため、研究者間で繰り返し検討した。
- 4) 倫理的配慮：A大学小児看護学実習修了後の実習評価の成績が確定後に本研究に関する説明書をメールにて説明文書を配布する。説明の文書には、研究目的、内容分析によるデータ処理、匿名性が完全に確保されていること、成績評価は終了し成績には関与しないこと、参加は自由意思で拒否による不利益は全くないこと、同意が得られない場合は、データから外すこと、成果について公表することを文書で説明した。同意が得られた実習記録分を分析対象とした。

【A大学小児看護学実習の外来実習の概要】

A大学小児看護学実習の外来実習でプリパレーション（心理的準備）を用いた教育方法を展開している。プリパレーションのテーマは、実習初日の体験を基に実習メンバーで検討し協議を重ね、プリパレーションで用いるツールを準備し、翌週の実習で実践する。

【結果】

レポート記録を分析した結果、【子どもの恐怖感を軽減する工夫】【子どもの協力を得た展開方法】【子どもと保護者の反応】【処置前の十分な説明の必要性】【小児外来看護の役割】の5カテゴリーで構成されていた。

【考察】

学生は、小児看護学実習の外来カレッジ実習に導入したプリパレーションの成果について振り返ることにより、実施時の子どもの反応を捉え、処置前の十分な説明の必要性を学んでいたと考える。小児科外来では、採血や点滴などの痛みを伴う措置だけでなく、吸入や診察の介助など恐怖感が優先され子どもの協力が得にくい中で、プリパレーションでの体験により、子どもが自主的に取り組む行動を踏まえ、外来看護の役割の実際を学んでいたと考える。そして、子どもだけでなく、外来受診を通して成長する姿勢を見守った保護者の反応を捉え、小児看護におけるプリパレーションの重用性を学べたと考える。

P1-057

看護系大学における小児看護学実習前のPBLに基づいたシミュレーション教育導入の検討(第1報)

厚美 彰子¹、橋本 美穂¹、古屋 千晶¹、池田 浩美²、伊藤 龍子¹

¹順天堂大学 医療看護学部

²順天堂大学医学部附属練馬病院

【目的】

本研究は、小児看護学実習前のシナリオを用いたバイタルサイン(以下VS)測定技術演習が、実習終了後の看護技術達成度どのように効果を与えているのかを評価し、Problem-Based Learning (以下PBL) に基づいたシミュレーションプログラム導入の検討と課題を明らかにすることを目的とした。

【方法】

2017～2018年に看護系大学の小児看護学実習を終了した3年生を対象に質問紙調査を実施した。質問内容は、受持ちの子どもの年齢、発達段階に合わせたVS測定(呼吸、心拍、体温、血圧)の技術15項目と、測定時の説明及び子どもの反応への対応9項目を4段階で回答を求めた。分析にはSPSSを用いた。

【倫理的配慮】

所属大学の研究等倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

配布数127部、回収数80部であった(回収率62.9%)。受持ちの年齢による比較では、57部を分析対象とした(有効回答率44.8%)。VS測定技術で平均値が高い項目は、2017年は、「体温の測定」「マンシェットを適切に巻く」を含む4項目が3.93であり、2018年は、「体温の測定(3.97)」「上腕動脈の位置の確認(3.95)」であった。平均値が低い項目は、2017年は、「心音を聴取する位置の確認(3.32)」「呼吸音を聴取する位置の確認(3.35)」であり、2018年は、「脈拍の触診(3.47)」「心音を聴取する位置の確認(3.60)」であった。測定時の説明と対応では、2017年は「頑張りを褒める」「プライバシーの配慮」を含む8項目が3.93と同一で、「家族への説明」のみが3.73と低く、2018年は、「頑張りを褒める(3.91)」「プライバシーの配慮(3.89)」が高く、「家族への説明(2.84)」が低かった。また、学生が実習を行う時期により平均値に差があった。

【考察】

平均値が高い項目は、演習後の振り返りで確認することが特に多い項目である。これは、演習シナリオが、子どもの成長発達段階を踏まえたVS測定技術の習得と、子どもの反応に合わせた測定方法の選択への効果を得ていると考える。しかし、演習シナリオでは家族がいる設定にはなっておらず、家族への説明に関する技術の習得度が低い。さらに、設定された発達段階での演習であり、各発達段階の演習を希望する学生もいる。今後は、限られた時間の中で、学生がVS測定の技術を習得しながら、受け持つ子どもの成長発達に合わせ、病状や予想される反応を想定し、測定方法を考え、実施できるようなシミュレーションプログラムの開発とその検証が課題である。